

「  
a

y  
e  
a  
r  
」

波  
島  
陰

【あらすじ】

正月を迎えた同性カップルの春名風香と浜崎鮎は、一年の抱負を語るでもなく平凡に年明けを過ごす。4月、友人の結婚式を機に、家族を作ることを本格的に考え始めた風香は恋人の浜崎鮎にプロポーズし、見事OKを貰い、二人は子供を持つという幸せに向かって努力している。こうとする。しかし、二人の前に立ちふさがるのは、同性カップルが共同親権を取れることはないという現実だった。それでも二人は諦めず、里親制度を利用することを決める。幼少期の鮎を知る児童相談所職員、倉田誠一や鮎の児童養護施設時代の友人、諸星朱音の協力もあり、二人は厳しい研修や審査を経て、無事里親に登録される。そして二人の元に委託の依頼がやってくる。委託されたのは14歳の少女、及川里奈だった。数年にわたる母親からのネグレクトを受け、父親は行方不明。初めは明るくふるまう里奈だが、徐々にな実親のいない寂しさや見捨てられるのではという不安から風香たちに愛情を試すためのわざと困らせるような言動をする。試し行動―をすること。風香も鮎も困惑しながら、自身のことからい経験を重ね、二人は少しずつ里奈に寄り添い、思い出を積み重ね、本当の親子のようになっていく。そんなある日、里奈の実の母親である千里が面会を希望してくる。里奈は千里に会う日を楽しみにし、二人も里奈の笑顔を喜ばしく思っていたが、面会の時間になって千里は来ず、里奈は心に大きな傷を負い、自傷行為をしてしまう。さらに里奈を止めようとした鮎も怪我をし、病院に運ばれるが、親族ではなく、結婚もしないでもない風香は鮎の症状を教えてもらえない。それでもなんとか前を向いて進んでいこうとする。3人だったのが、風香らが千里の希望する面会を拒否したこと、さらに不安定になる。た千里は里奈を連れ去り、心中しようとする。住んでのところを止められ、事件をきっかけに明だった里奈の父、貞夫が事件をきっかけに

帰って来て、金が溜まったので二人を引き取  
ると言い出す。風香も鮎も反発するが、法律  
上どうしようもなく、二人は泣く泣く里奈と  
別れることになる。それでも二人は前を向い  
て、里奈を取り戻す道を模索していこうと前  
を向いて生きることを決意し、また、里奈も  
ギャンブルにばかり興じる貞夫のもとで強く  
生きていく。月日はすでに次の一年を迎えよ  
うとしているが、その一年は確かに三人の生  
きが変わった、大切なものだった。

【登場人物表】

春名風香：レズビ안의ウェブデザイナー。

家族とは仲が悪く、また、卵巣機能不全で子供が出来ない。結婚式を機に、自分のような人間でも家族を持てる方法を模索する。同性愛者であることをまだ家族に言えていない。

浜崎 鮎：風香の恋人。母親に虐待されて育った。

倉田 誠一：児童相談所職員、鮎の幼少期をよく知る人物で、二人の里親としての相談に乗ったりする。

及川 里奈：明るくふるまっているが、実は母親の愛情に飢えており、それがもとで周囲を困らせることも。

及川 千里：荒れた生活を送る里奈の母。長男を流産したことでメンタルが崩れてしま

うが、里奈への愛情は本物。

及川 貞夫：行方不明になった里奈の父。

諸星 朱音：鮎の児童相談所時代の友人。鮎の里親登録の相談に付き添ったのを機に児

童相談所で働き始める。

大倉 里穂：風香の地元の後輩。

春名 愛子：面倒見のいい風香の姉。

春名 栄一：風香を優しく見守る父。

春名 洋子：風香の母、風香の病気の発覚を機に怪しい宗教にのめりこむようになる。

○ 1 風香のマンション・リビング 夜  
 風香のマンションから見える街の景色、  
 地面に少しだけ雪が降っている。  
 風香は眠そうにソファに座っている。  
 鮎がコーヒーの入ったマグカップを二  
 つ持ってソファに座る。  
 鮎「ホラ！風ちゃん！もうすぐ年越しの時  
 間だよ」  
 風香「えー、眠い：最近疲れやすくなった、  
 年なんか越したくない：」  
 というところから風香、鮎の肩にもたれかかる。  
 テレビから流れるカウントダウンの声。  
 鮎、風香に配慮し、小さい手拍子でカ  
 ウントダウンする。  
 風香は寝息を立てて寝始める。  
 テレビ（声）「10'9'8'3'2'1'  
 ハッピーニューイヤー！」  
 鮎は笑顔で拍手をする。  
 鮎「風ちゃん、あけましておめでとう」  
 風香「（少し目を覚まして）あけまして：お  
 めでとう（また寝る）」  
 鮎「重いな（笑）ふふっ」  
 × × ×  
 鮎が目を覚ますと、風香はもういない。  
 鮎、スマホを見ると風香からの通知が一  
 件。  
 「鮎へ、あけましておめでとう、福袋  
 を買ってきました、待っててね！」  
 鮎はそれを見て微笑み、朝ご飯の支度  
 を始める。  
 （テ）  
 「1月」

○ 2 同・仕事部屋 同  
 風香はパソコンでウェブサイトのデザ  
 イン案を作っている。  
 鮎がドアをノックする。  
 風香「ん？」  
 鮎「これ、招待状来てた、結婚式だって」  
 風香「おう、ありがとう」  
 風香は招待状を複雑そうな面持ちで眺

めている。

○ 3 ネットスーパー（内） 夜

パートやバイトの人たちが商品を梱包

鮎「あけましておめでとうございます」  
パートの人たち「おめでとうございます」

○ 4 同・寝室（内） 同

風香、養子縁組に関する本を読んでいる。

（携帯の着信音）

姉からの着信が来て、怪訝そうな顔を  
する風香。

風香「何？こんな朝早くに？…招待状？ああ、

（タイトル）「a year」

○ 5 結婚式場・駐車場（内） 昼

車を停めた風香。車のドアにロックを  
かけ、神妙な面持ちで歩き出す。ベレ  
ー帽にサングラス、マスクを着用して  
いる。

（テ）「4月」

エントランスの近くには姉、春名愛子  
（36）の姿。

愛子「よ」

風香「どうも、待ち伏せですか」

愛子「逃げないようにね」

愛子と風香、歩き出す。

風香「ここ（地元 葉山）何年ぶりだっけ？」

愛子「大体：14年？」

風香「そのぐらいになるか」

愛子「ここ（風香と愛子）はまだ会うけどね、

最近どう？いい人いないの？」

風香「いない」

愛子「だよね：いやだよねって言うのもおか  
しいか（笑）」

○ 6 同・プライズルーム（内）

大倉里穂（31）がウェディングドレス姿でお色直しをしている。そこに入っていく風香と愛子。

愛子「里穂！風香来たよ」

風香「よ」

里穂「えっ、えっ！えっ？マジで？来たの？」

風香「お前が呼んだんじやろがい」

里穂「いやちよっとマジで来ると思ってなかったんで、嬉しいっす」

風香「どういう意味よ（笑）」

里穂「えっ、いやだっ：なん、何年振り？」

風香「皆聞くよねそれ」

愛子「いやでも最後に会った時里穂大学：」  
里穂「だい：がく4年とかだから、あゝ懐かしいもう10年も経つ」

風香「10年か」

里穂「おかげさまで、（得意げに指輪を見せて）結婚しました」

風香「おめでとうございます」

里穂「後風香さんだけっすよ」

風香「それもみんな言う」

里穂の笑い声が響く中、風香は上手く笑えない。

風香「変わらないね」

里穂「いや風香さん変わりすぎですよ」

○ 7 同・女子トイレ 洗面所（中）

愛子「愛子と風香、メイクを直している。」

風香「本当に会ってかなくていいの？」

風香「うん」

愛子「式は出んの？」

風香「席離れてるっしょ？」

愛子「うん、まあまあ」

風香「じゃあ出るかな、長居はしないけど」

愛子「：まあでも来てくれてよかった」

風香「え？」

愛子「来ない理由、山ほどあんでしょ？」

風香「まあでも、後輩に罪はないから」

○ 8 式場前 昼

退屈そうにスマホをいじる風香。  
会場からかすかに漏れ聞こえるクラシ  
ック音楽。  
「♪ G 線上のアリア」  
風香、少しばかりため息をつき、意を  
決して披露宴会場へと歩みを進める。

○ 9

結婚式場・披露宴会場内 昼  
風香、神妙な面持ちで式場へと入って  
いき、新郎新婦や風香の父母とは離れ  
た位置にある席にそくさと座る。  
トレイにシャンパン入りのグラスを乗  
せたウェイターがやってくる。

ウェイ

ター「いかがですか？」  
風香、一礼して一杯受け取り、グイッ  
と飲み干す。

風香

「（手を挙げて）すみません、もう一杯」  
風香、ウェイターからもう一杯もらい、  
再びありがとうと頭を下げる。

司会

の声「まもなく、新郎新婦の入場です。  
皆さん大きな拍手でお迎えください」  
大きな拍手に包まれ、新郎新婦（里穂  
とその夫）が入場してくる。

風香も堅い笑顔で拍手。

風香

○ 1 0

（回想）レズビアンバー（内） 夜  
（テ）「一年前」  
風香、友人たバーで飲んでいる。風香  
は随分酔っぱらっている様子。

風香

「結婚がさ、したいわけじゃない。私た  
ちビアンは」

友人 A

「でもさ、無理じゃない。無理って言う  
か、この国では？この地域では？」

友人 A

「でもさ、したいじゃん？したいっし  
よ？」

友人 A

「そりやもちろんもちろん」  
風香「だからね、あの：何が言いたってさ、



別に結婚しないわけじゃないのよ、出来  
ないだけって話」  
友人 A、適当に相槌を打つ。

○ 1 1 (回想) 飲み屋街 同

酒を飲みすぎ、酔いつぶれて歩く風香。  
風香、だるそうに肩をまわし「イッテ

：「とつぶやく。

その時、おっさんに絡まれているデリ  
ヘル嬢(鮎)を見つける。

鮎 「やめてください」

おっさん「いいじゃないもうちょっとだけ、お  
金払うからさ」

鮎 「次ありますんで」

おっさん「固いな鮎ちゃん、そんなだと  
婚期逃しちゃうぞうそうだ、いつそ俺と

結婚する？なんて、ハハハハ！」

(風香、スル―していこうとするが、  
おっさんの言葉を聴いて虫唾が走り、)

風香 「おい、(おっさんは聞いてない)お  
いそのおっさん！(おっさん振り向

く)：消えろ」

おっさん「あ？テメエ誰だよ」

風香 「そいつの次の客だよ！」

風香 「どけよおっさん金が無駄になんだろう  
が！おら行くぞ！(鮎の手を無理やりつ

かんで引っ張っていく)」

○ 1 3 (回想) 自動販売機前 同

風香、鮎の手を放し、疲れた様子で大  
きくため息をつく。

鮎 「あの・・・」

風香 「ん？」

鮎 「ありがとうございます」

風香 「あ、ありがとうございます」

いません：えっと、車のとこまで戻りま  
しよっか」

鮎 「あ、車無いです」  
風香 「へ？」

鮎 「さっきの嘘なんです、次のお客さんって、あいう人をまくための方便っていうか？」  
 風香 「ああ、じゃあこのまま歩きで？」  
 鮎 「ええ、まあ歩きっていうか、電車」  
 風香 「はあ：あの、風俗って女もいける？」  
 ○ 1 4 (回想) ラブホテル(内)  
 (二人の粗い吐息)  
 ベッドの上で抱き合いながら濃厚なキスをする風香と鮎。  
 鮎 「：していいですよ」  
 風香 「え？」  
 鮎 「本番」  
 風香 「少しためらっている」  
 鮎 「いいじゃないですか、お金払わなくていいですから。店通してないし」  
 風香 「：」  
 鮎、風香にキスをする。  
 風香、鮎を押し倒し、上着を脱がせて下着姿にする。  
 すると露わになった鮎の腕に大きなあざがあるのが見える。  
 風香 「(それを見て)：！」  
 × × ×  
 カップ麺を啜る二人。  
 机には開いたビールの缶がいくつか。  
 鮎は酔いが回ってきたのか少し饒舌に。  
 「5歳ぐらいで父親が死んでさ、そこからずっと育児放棄？と暴力？食らっててでまあお腹空いてるから万引きで食べてたんだけど、警察捕まって、最初は普通に家に戻されてたんだけど、なんか7、8回目？ぐらいの時に兄相の人が来てさ、担当変わった？らしくて、兄相行くことになったの。で母親捕まって施設出て、今こなんだけど：あれ何の話だっけ？あ、そうだ！傷見て、イヤになっちゃった？」  
 風香 「いや、そういうことではない」

鮎 「じゃあなんで？」  
 風香 「なんかやだなって」  
 鮎 「何が？」  
 風香 「会ってその日にやるの、いや、仕事以外でね」  
 鮎 「わかってる、気遣わなくていいから慣れるし」  
 風香 「……」  
 鮎 「お姉さんモテるでしょ？」  
 風香 「え？……いやいや……」  
 鮎 「嘘だ嘘だ絶対モテる（笑）」  
 風香 「いや……まあまあね」  
 鮎 「ほら！（苦笑して）……じゃあ（セックスを）したらよかったのに」  
 風香 「……してくれた方が、嬉しかった？」  
 鮎 「いや、そうでもない」  
 風香 「じゃあいいでしょ別に（笑）」  
 （間）  
 鮎 「どうする？まだ時間あるけど」  
 風香 「時間って、仕事じゃないんでしょ？」  
 鮎 「もうどっちでもいい」  
 風香 「ハハ……お金、払うよ」  
 鮎 「……」  
 風香 「……」  
 鮎 「いや、いいいいいい」  
 風香 「大丈夫別に、はした金だから」  
 鮎 「いや、本当に、カップ麺までご馳走になつて逆にお金払わないと」  
 風香 「いやいやいやいや（笑）え……じゃあさ」  
 鮎 「ん？」  
 風香 「連絡先、交換してよ」  
 鮎 「え？いいよ」  
 風香 「鮎、無機質な携帯を出す。  
 風香 「（ロック画面を見て）めっちゃ通知来てるじゃん」  
 鮎 「え？あ、ヤバこっち仕事用（笑）」  
 風香 「そう言ってる鮎はキーホルダーやシールの付いた携帯を取り出す。  
 風香 「大量にスタンプ送る（笑）」  
 鮎 「やめてシヤレにならない」

風香「…」

愛子も息子の直人（８）と共に「お嫁さん綺麗だね」と言いあっている。

か泣いている。

の席に目をやると、洋子も感動した。

風香がふと自分の両親（栄一と洋子）

て里穂の両親も大号泣している。

に感極まって里穂は涙を流す。つられ

向けて感謝の手紙を読んでいる。次第

式も山場に差し掛かり、里穂は両親に

結婚式場・披露宴会場（内）夕方

○ 1 6

風香「…」

鮎「…」

風香「仕事辞めなくてもいいから、一緒に住まない？」

鮎「え？」

風香「…ねえ、ウチ来ない？」

鮎「ん？」

風香「自分売って生活するのが？」

鮎「ん？」

風香「ふん、じゃあさ、なんで水商売やっ

てんの？」

風香「いかな」

鮎「いやまあ人によるけど、人気はまあな

アザ持ってて風俗って出来んの？」

風香「あのさ、一個気になってたんだけど、

○ 1 5 （回想）駅前道路 朝

風香「早朝、朝日に照らされる風香と鮎。

鮎「うん、唯一親に感謝してんのこの名前」

風香「（苦笑する）今の世代知ってる？」

鮎「全然知らない（笑）」

風香「鮎と風香、LINEを交換する。

よね。浜崎あゆみと一文字違いっていう」

鮎「うん、唯一親に感謝してんのこの名前」

風香「（苦笑する）今の世代知ってる？」

鮎「全然知らない（笑）」

風香「てかいね、それ（携帯）、いかにも

女の子って感じ」

鮎「自分はどう女の子ではないと？」

風香「まあ、自分では言わない」

鮎「だから会ってその日にはやらない」

風香「やかましい（笑）」

風香、居心地が悪くなったのかシャン  
パンを飲み干し、出ていく。  
その姿を見ていた栄一。

○ 17 同・エントランス 夕方

栄一 「おい」 風香、驚いたように振り向く。

栄一 「来てたのか、久しぶりだな」

風香 「：いつから気づいてたの？」

栄一 「愛娘が来たのに気づかない親があるか」

風香 「あの人が気づいてて声かけないとは思えないけど」

栄一 「安心しろ、アイツには言っていない」

風香 「：で、何しに来たの？」

栄一 「ああ、もう帰るのか？」

風香 「仕事で急用が入って、お姉さんにもそう伝えといて」

栄一 「風香、踵を返して帰ろうとする。」

てくれよ、母さん寂しがってるから」

風香、無言で去っていく。

○ 18 イタリア料理店（内） 夜

夜景の綺麗なイタリア料理店。

風香は一人、携帯で記事を見ている。

記事のタイトル、「子供を授かったゲ

イ夫婦 多様化する家族のカタチ」

少し急いだ様子で鮎がやってくる。

風香、手を挙げて

鮎 「ごめんお待たせ、まだ（料理）来てない？」

風香 「うん、まだ」

鮎、忙しなく椅子に座る。

鮎 「結婚式、どうだった？」

風香 「ん、まあまあかな」

鮎 「何それ（笑）：てか珍しいね、こんな

お洒落なお店」

風香 「：」

鮎 「（何かを察している様子）」

○ 1 9 海沿いの道 夜

風景の綺麗な港沿いの道。  
ご機嫌に酔っている様子の二人。

風香 「美味かった。ごちそうさまです」  
鮎 「さっき言ったよ、ほらちゃんと前見て」

風香、子供みたいにくてくとき小さい  
歩幅で歩き出す。

鮎 「遅い！（笑）」

風香 「あゆ、甘いもの食べたい」  
鮎 「さっきデザート食べたでしょ」

と言うと、鮎は再び風香の隣に戻って  
介抱しようとする。

鮎 「あゝ」  
鮎 「あゝ」

紗香 「いーじゃん、誰も見てない」  
鮎 「うん」

鮎はまんざらでもない顔で手を繋ぎ、  
二人並んで歩き始める。

○ 2 0 公園のベンチ 夜

うなだれた態勢でベンチに腰かけてい  
る風香。

そこに鮎がやってきて風香に買ってきた  
アイスを手渡す。風香はすっかり酔い

が醒めた様子。

風香 「ありがと」  
風香と鮎、並んで座り、アイスを食べ

る。

鮎 「酔い、醒めちゃった？」  
風香 「風香、うなだれたまま頷く。」

風香 「なーんかさ、やっぱ悔しいなって」  
鮎 「え？」

風香 「結婚式」  
鮎 「ああゝ」

風香 「昔から、人並みの幸せは諦めて生きて  
来たって言うか、つかめなかったんだよ

ね、普通の人の幸せってやつを」  
鮎 「うん」

風香「でも：なんか最近、諦めなくてもいいの。かもって、思ってた」

鮎「え？」

風香「鮎、鞆から箱を取り出し、鮎に無理やり手渡す。」

鮎「開けてもいいのかと言うように風香を見つめ、風香は黙ってうなずく。中を開けると、そこには指輪が。」

鮎「：！」

風香「：結婚しよう、鮎。私、鮎と幸せになりたい。結婚して、子供産んで、そういいう幸せになる道を：一緒に、探してくれないかな？」

鮎「風香は真つすぐに鮎の眼を見つめる。鮎、照れたように少し笑って、頷く。」

鮎「私も：」

鮎は涙を浮かべ、風香の手を握りしめる。

風香も我慢していたのか、力が抜けて泣いてしまう。二人で抱き合って。

鮎「アイス溶けちゃうよ（涙声）」

風香「そうだね（笑）」

○ 2 1 風香のマンション・リビング（内）

昼

（テ）「5月」

風香、パソコンを叩いて何かを熱心に調べている様子。

鮎、風香の机にコーヒーを置く。

風香「ありがと」

鮎「何見てんの？」

風香「なんか、同姓カップルの人が養子を迎えたって、記事で」

鮎「へー」

風香「参加してみようかな、これ」

鮎、風香が見せたパソコン画面の文字を見て

画面には「養親希望者向け相談会」と

○ 2 2 相談会会場（内） 昼  
風香と鮎、講師の説明を聴いてメモを取っている。他にも養親希望者たちが熱心にメモを取りながら話を聴いている。

講師「まず養子縁組には～種類の制度が存在します。特別養子縁組と普通養子縁組です。ね。この二つの大きな違いはまず親との親子関係が終了するかどうかです、特別養子縁組は：」

× × ×  
風香と鮎、並んで個別相談会の列を待っている。

講師の声「次の方、どうぞ」  
一緒に相談室に入っていく風香と鮎の姿を訝しげに見る人々。

風香「（ドアをノックして）失礼します」

○ 2 3 相談室（内） 夕方  
風香と鮎が入ってくるなり、一瞬驚いた表情を見せる講師。

風香「こんにちは」  
鮎「こんにちは」  
講師「こんにちは、どうぞおかけになってください」

風香と鮎、「失礼します」と言って椅子に座る。

講師「本日は説明会にお越しください、誠にありがとうございます。お二人は：その、どういったご関係で？」

風香「えっと：パートナー、です」  
鮎「一礼して苦笑い。」

講師「：普通養子縁組をご希望ですよね？」  
風香「：ええ、まあ、はい」  
講師「：子供が、欲しい？」  
風香「：はい」

講師「：まず最初に申し上げますね」  
息をのんで講師の声に耳を傾ける二人



講師 「普通養子縁組を結ぶときはまず、講習  
 を受けて、そこから家庭裁判所による審  
 査を受ける必要がありまう。これはさっ  
 き説明会でも話したと思ふだけ、同  
 性カップルの場合、普通の夫婦に比べ  
 審査が通りにくいんです。お二人もご存  
 じだと思ひますが、日本では同性カッ  
 プルの法律婚が認められていません。で  
 からの法律婚が認められていない。仮  
 に審査が通ったとしても、養親として認  
 められるのは同性カッブルのどちらか  
 方だけなんです。日本では同性カッブル  
 の共同養子縁組は認められていない状  
 態、どちらか片方は法的な親権がない  
 になります。」  
 鮎 「：あの、パートナー、パートナー  
 プはダメなんですか？」  
 講師 「パートナーシップ制度を利用すればも  
 ちろん普通の結婚に近い形の権利を有す  
 ることが出来ます。ですが、その権利が  
 だ、普通の夫婦に比べても一部の権利が  
 認められるに過ぎませんから。」  
 風香 ・鮎 「：」  
 講師 「もしお二人が、どちらか一方にしか親  
 権がない状態でもいとおつしやるなら  
 、養子縁組は可能かもしれません。でも  
 、同性カッブルが子供を持つ方法は、何  
 養子縁組だけじゃない。例えば里親制度  
 を使ったり、日本では認められていま  
 さんが代理出産や精子提供と言った形  
 海外で、子供を産む選択もありますか？  
 そういったことはご検討されましたか？」  
 風香 「：私、子供産めないで。」  
 講師 「ああ、それは失礼しました。」  
 風香 「いえいえ。」  
 鮎 「：」  
 講師 「どの選択肢にもそれぞれ違うメリツト  
 、デメリツトがあるもので、お二人でよく

○ 2 4 カフェ（内） 夕方  
風香と鮎、カフェで休憩している。  
日当たりのいい窓際の席に座っており  
、風香が飲み終えたコーヒーのグラス  
の氷が陽光に反射して照らされている。  
風香、書類を見てため息をつく。

鮎 風香、書類を見てため息をつく。

風香 「なんか、買ってこよつか？」

鮎 「へ首を横に振って」ありがとう、でも大丈夫。ごめんねなんか今日、付き合わせちゃって」

風香 「もうちょいちゃんと調べるべきだった」

鮎 「大事なことでしょ？夫婦二人でないと」

風香「うん」  
鮎「アテがあつてさ」

鮎 「白紙にしないでもいいんじゃない？ 私  
も不安だけどさ、そのことで風ちゃんに  
諦めてほしくないし。ねえ、さつき弁護  
士の先生、里親制度って言ってたじゃん

風香「両方だと思う」

鮎 「風ちゃんはそのでいいの？」  
風香 「：やっぱり、突っ走りすぎたのかなって。昔からさ、自分は子供を持つちやいけないうって思ってた、その反動なんだと

○25 車内同 車を運転している風香と、助手席に座

○ 2 5 車 内 同

鮎 「だから申し訳ないんだけどさ、今日ち  
よつと話が進まなくてホツとしたってい  
うか？」

鮎、砂糖が下に溜まったアイスティーをかき混ぜる。

「：正直言うとき、私、良い親になれる

鮎  
「風ちゃん  
は急だから  
ね、何事も」

風香と鮎が児童相談所にやってくる。  
 児童相談所職員、倉田誠一（39）が  
 出迎える。  
 倉田「鮎ちゃん！久しぶり」  
 鮎「お久しぶりで、倉田さん」  
 倉田「立派になったね、何年ぶり？」  
 二人が再会を喜んで、物陰から  
 二人の荷物を持ち、ひょっこりと現れ  
 た女性、諸星朱音（24）。  
 朱音「オッス、倉田ちゃん！」  
 倉田「え？朱音！久しぶり！」  
 朱音「鮎から久々顔出すって聞いたんで、来  
 ちゃいました。ヒマなんで」  
 風香「初めました、春名風香と申します」  
 倉田「あ、はじめまして。わたくしこの児童  
 相談所で児童福祉司をしております。倉  
 田と申します。どうぞよろしくお願いま  
 します。鮎ちゃんから話は伺っております  
 のでどうぞこちらへ！」  
 風香「はい！」  
 朱音「子供たちが珍しそうに風香を見る。  
 へい子供たち！お姉さんと遊ぼうぜ」  
 ー  
 と言って朱音、子供たちを連れだす。  
 ○27 同・相談室（内） 同  
 倉田「ぶ子供たちと朱音の姿。楽しそうに遊  
 倉田「でもよかったです、鮎ちゃんがこんな素  
 敵な人連れて戻ってくるなんて」  
 風香「いえいえ、そんな」  
 鮎「施設出たらみんな基本消息不明だもん  
 ね」（笑）」  
 倉田「まあまあまあ」  
 風香「ううんまあ、連絡が来ることはあんま  
 り。来たとしてもいい内容じゃないこと  
 も多いですし、やっぱり大人になると  
 、なかなか頼りづらいいじゃないですか。  
 周囲の人とか。ここの子供たちはみんな独

風香「：」  
 倉田「失礼、話が脱線しました。今日は里親登録についての相談とやることで間違いないでしようか？」  
 風香「はい」  
 倉田「まず初めに、里親になるためには当相談所で面接を行います、そこから県が実施している研修会に参加していただきます：」  
 〇 2 8 風香のマンション・リビング 昼  
 風香と鮎、朱音の三人で面接の練習をしている。朱音が面接官の役のようにだ  
 朱音「お二人がどのような家庭で育ってきたか：ちょ（笑）」  
 風香「えきれず笑ってしまったが、風香が突然こらえきれず笑ってしまふ。」  
 朱音「なんで笑ってんの？何で笑ってんの？」  
 風香「ごめんなさい（笑）」  
 鮎「一回笑ったとこ、一回」  
 鮎は風香の背中をさすりながら  
 一瞬の沈黙の後、また風香がツボに入ったように笑いだす。  
 朱音「うちあかんぞこれ（笑）」  
 〇 2 9 研修会会場（内）  
 面接を終え、研修を受けている風香と鮎。  
 講師 B「まず簡単に本研修の目的を説明します。まず一つ目は社会的養護における里親制度の意義と役割を：」  
 里親経験者の話を聴いている二人。  
 〇 3 0 風香のマンション・リビング 寝室  
 風香のマンション・リビング 寝室

[illegible]

風香「う人は少ないと思いますので！」  
 倉田「ですが、今日までのお二人の姿を見て  
 僕は二人なら大丈夫だと確信しています  
 。普通の家族となら変わりないくらい  
 健康に、聡明に子供を育てられると思っ  
 ています。お二人には、子供の気持ちを忘  
 尊重する心があるから。どうかそれを忘  
 れないでください。だから僕も全力を尽  
 くします。審査中も、審査後も、全力で  
 お二人のサポートをしていきたいと考え  
 ています。困難なことは多いと思います  
 が、一緒に頑張っていきたいと思います  
 。そう、いつて手を差し出す倉田。  
 風香、倉田と強い握手を交わし、鮎の  
 方を見る。  
 鮎も強い握手を交わす。  
 風香・鮎「よろしくお願いします」  
 倉田「よろしくお願いします。では、これに  
 て失礼します」  
 風香と鮎、倉田を玄関まで見送る。  
 テーブルには倉田のモノと思わしきハ  
 ンカチが残っている。  
 倉田の声「失礼いたしました」  
 （ドアが閉まる音）  
 風香「ふうと終わった」  
 鮎「長かった」  
 風香「？」  
 鮎「？」  
 風香「これ、ウチのじゃないよね？」  
 鮎「あ！ちよつと行ってくる！」  
 風香「ハンカチを持って突っ走って出  
 ていく。」  
 ○ 3 2 同 玄関  
 鮎「鍵もかけずに出ていった風香。  
 鮎は玄関の廊下で呆然としている。  
 「あ、気が付けて！」  
 （風香が出ていく音）

少し間があって、息を切らした倉田が入ってくる。

倉田 「すいません忘れ物：（風香がいないことに気づいて）あれ？」

鮎 「：すれ違いませんでした？」

倉田 「：すいません、ちよっと覚えが：」

鮎 「あ：じゃあちよっと、そこで待っていて」

倉田 「はーやらかした：」

鮎 「：倉田さん」

倉田 「ん？」

鮎 「いやさ、まあ別にいいんだけど、施設出てからの6年間、何やってたか気になんないのかなって」

倉田 「：聞いていいの？」

鮎 「別にいいでしょ（笑）朱音なんか万引きで捕まってるんだから」

倉田 「まあまあ（苦笑い）：うーん生きてさえてくれるればそれでいいかな、僕は」

鮎 「：」

倉田 「本当に良かったよ、なにはどうあれ鮎ちゃんがかうしていい人と巡り会って」

風香 「その時、風香が汗だくで帰ってくる。？」

風香 「ダメだ、倉田さん：（気づいて）：？」

「  
呆然とする3人。」

○ 3 3 マンション脇の駐車場 夕方

風香 「風香と鮎、家庭訪問を終え、気分よさそうに歩いている。」

風香 「ひやう終わった、本当に、お疲れさまでした」

鮎 「いやいやもうそれは全部、風ちゃんの努力だから」

風香 「努力しました」

鮎 「お疲れ様です」

風香 「褒めて」

鮎 「偉い偉い」

風香 「思ってる？」



鮎 「思っ 風香と鮎、爆笑していたが突然風香の  
 風香の目が止まる。目の前に立っている人  
 間を見て啞然としているようだ。  
 風香の目の前にいるのは父、栄一。  
 栄一は風香の薬指の指輪を見て驚いて  
 いる様子で、鮎は風香の様子に戸惑っ  
 ている。  
 〇 3 4 風香のマンション・リビング 同  
 風香、少し怪訝そうにお茶を用意して  
 いる。鮎と栄一の斜め向かいに座って  
 おり、どこか気まずい雰囲気。  
 栄一 「娘の：ご友人ですか？」  
 鮎 「ああ：まあ、なんていうか：」  
 風香 「なんで来たの？」  
 風香は3人分のお茶を出し、そそくさ  
 と父の正面に座る。  
 栄一 「え？ああ、えっと、ちよっと近くで用  
 事があったって」  
 風香 「用事って？」  
 栄一 「ちよっと愛子に手伝い頼まれて」  
 風香 「栄一はどこか歯切れが悪い。」  
 風香 「聞きたいなら早く聞いて」  
 栄一 「えっと：結婚するんだな、おめでとう  
 ー」  
 風香 「結婚はしない、正確に言うと出来ない  
 ー」  
 栄一 「：？」  
 鮎 「初めまして、風香さんとお付き合いさ  
 せていただいてます。浜崎鮎です」  
 栄一 「：えっと：ふうか、の、婚約者さん？  
 ー」  
 鮎 「（無言でうなづく）」  
 風香 「そういうことから、正確には結婚で  
 きないんだけど、ほとんど結婚してるよ  
 うなもんだから、ね？」  
 鮎 「うん」  
 栄一 「あ：あり：あ、お、そうかそうか、お

22

魚占

「あゝそういう……」

産んで育てて一人前みたいな考えの人だ

風香「何だろう、悪い人ではないんだけど、

「た  
く  
な  
い  
こ  
と  
ば  
っ  
か  
り  
じ  
ゃ  
な  
い  
？」

よね。自分たちの家族の話」

ん  
も  
ー

風香  
「  
（  
フ  
イン  
ンを  
グ  
イツ  
と飲  
み干  
す）  
—

又、主い  
で飲ん  
でいる。

○  
3  
6  
同  
・  
リ  
ビ  
ノ  
グ  
同

風香「大変だね、色々」

ポンポンと叩く。

る証拠があるだけでも大喜びだからな」

「どんなに時間がかかってもいい、まず

「差し金つて、お前……」

風香「つまみ食い今日来たのはあの人の差し金？」

パソコンのデスクで昼食を取りながら  
 デザインをプログラミングしている風  
 香。そこに一本の電話がかかってくる  
 風香、電話に気づいてフロアを出て、  
 電話を取る。  
 風香「もしもし：ああ、倉田さん。お久しぶ  
 りです：ああ、通った？ああ：良かった  
 です（微笑む）：え？」

○ 3 8 児童相談所・相談室（内） 昼  
 （テ）「8月」  
 セミの鳴き声が響く。  
 神妙な面持ちの風香と鮎。倉田が二人  
 と向かい合っている。テーブルの上に  
 は何枚かの書類。  
 倉田「書類を読みながら話す倉田。  
 生。及川里奈さん、現在14歳。中学2年  
 日。女の子ですね。誕生日は11月14  
 さん。実親については母親として及川千里  
 家庭はいわゆるネグレクトの状態で、千  
 里さんは現在精神的にも金銭的にも里奈  
 ちゃんを育てることは難しいと判断され  
 、保護することになりました、何か質問  
 などありますか？」  
 風香も鮎も首を横に振る。  
 倉田「（無言でうなづく）いかがですか？」  
 倉田・鮎「：」  
 倉田「もちろん、お断りすることも可能で  
 す。お二人できちんと言合ってください」  
 風香「：まあこの場では即答は：」  
 倉田「：ですよね」  
 鮎「：あの、里奈ちゃんに会うことって：」  
 倉田「？」  
 鮎「ああ、いや、面会とかじゃなくて、遠  
 くからでもいいいんで姿を見られたらなあ  
 って：」  
 倉田「：」

窓の外から聞こえる子供たちの楽しうな声。

○ 3 9 同・一時保護所（前） 同

一時保護所の前で子供たちの様子をうかがう風香と鮎。子供たちと遊ぶ職員の中にエプロンを着た朱音の姿が。

風香・鮎「：！」

倉田「驚きました？驚かせたいから二人には黙っててほしいって、朱音ちゃんが」

鮎「いつからここに？」

倉田「それはぜひとも本人に」

朱音が少女に引っぱられ、別の子供たちのグループに連れていかれる。朱音を連れて行ったその少女は、及川里奈（14）。

風香「：あれ」

倉田「：鮎ちゃん、朱音ちゃんには？」

鮎「：やめときます」

風香「え？でも：」

鮎「首を横に振って」あの子たちから、先生とるのは酷じゃない？」

朱音と楽しそうに遊ぶ里奈の姿。

鮎「そう伝えといて」

倉田「（無言で強くうなづく）」

風香と鮎は去っていく。

夢中で遊んでいた里奈、倉田の姿を発見して

里奈「倉田さん！」

元気に手を振る里奈。他の子どもたちもつられて倉田に手を振る。朱音は小さく会釈して、倉田も同様に返す。

○ 4 0 同 相談室（内） 夕方

倉田と里奈、向かい合って座っている。里奈は手元の資料をパラパラと見てい

る。倉田「ずっとってわけじゃない、けどお母さ

んが里奈ちゃん、と暮らせるようになるまで、里奈ちゃん、の、いわば第二の家族として、里奈ちゃん、と暮らすつていう、提案」

倉田「：お母さんとは、また暮らせる？」

倉田「もちろん、それはお母さんの頑張り次第だけど、僕たちも里奈ちゃんがお母さんと暮らせるように出来る限りサポートする」

里奈「じゃあこの人たちはお母さんの代わりつてこと？」

倉田「（苦笑いして）：まあ、そうなるね」

倉田「ふーん：」

倉田「もちろん、里奈ちゃんにも断る権利がある。もし嫌なら：」

里奈「この二人つてさ、レズなんだよね？」

倉田「：？うん、まあ、少なくとも春名さんの方は：どうか、した？」

里奈「？ううん、そっちの方がいい。なんか面白そうだし。家族が増えるつてコトでしょ？」

倉田「まあ、そうとも言えるね」

里奈「女同士つてどういう感じなんだろ？どつちかが男の格好してたりする？」

倉田「それはないよ（笑）」

○41 千里のアパートの一室（内）夕方

ため息をつくように、たばこの煙を吐く女性。里奈の母親、及川千里（31）。部屋にはゴミ袋が溜まっており、食べかすやビールの空き缶が散乱している。

倉田が書類を持って里親委託の説明に上がっている。

千里「（煙を吐いて）で？それにサインしろつてこと？」

倉田「はい、こちらに印鑑とサインをいただければと（書類を差し出す）」

千里「（ため息をついて）何？そっちじゃダメなの？その、預かるとこは」

倉田「あくまで児童相談所は一時保護のため

千里「場所ですの：」  
 千里「（舌打ちをして）里奈は？元気でやっ  
 てんの？」  
 倉田「吸殻を灰皿に押し当てる千里。  
 「ええ、職員ともよく遊んでいて、毎日  
 元気な姿を見せてくれています」  
 千里「可哀そうだね、せつかく仲良くなつた  
 職員さんと引きはがされてさ：」  
 倉田「まあ、そう言わず、娘さんも頑張ってる  
 んですから、お母さんも：」  
 千里「頑張ってるよ！」  
 千里「千里は激昂し、空き缶を投げつける。  
 千里「知ったような口聞いてんじゃねえよ」  
 倉田「：」  
 千里「（困ったように頭を掻いて）これさ、  
 あれでしょ？私へのあてつけでしょ？私  
 が十分に子育てできてないからこんな親  
 の方がマシだって言いたいんでしょ？」  
 倉田「そんなことありません：もし大きく反  
 対される理由がなければ、お子さんのた  
 めにも、基本的にはサインをお願いして  
 います」  
 千里「千里、イライラした表情でため息をつ  
 き、サインをする。  
 倉田「まずは病気を治しましょう、ね？」  
 千里「：」

○ 4 2 児童相談所・相談室（内） 昼  
 （テ）「9月」  
 緊張した様子の風香と鮎、と倉田。  
 風香「（服装）地味すぎたかな：？」  
 鮎「派手すぎるよりいいよ」  
 風香「大丈夫？おばさん臭くない？」  
 鮎「：大丈夫」  
 風香「何？今の間？え？大丈夫？」  
 倉田「大丈夫ですよ、リラックス」  
 鮎「（ドアをノックする音）  
 風香・鮎「：！」  
 倉田「どうぞ！」  
 朱音に連れられて里奈が入ってくる。

朱音 「失礼します」  
 里奈 「失礼します」  
 朱音 「じゃ、頑張ってる」  
 朱音 はガッツポーズを掲げて出ていく。  
 鮎 「早く行け（笑）」  
 風香 ・里奈 「あっ！」  
 風香 「あっ、どうぞどうぞ！」  
 里奈 「いやいやいやいや（笑）え？じゃあ：  
 及川里奈です、14歳です。趣味は、え  
 ！と：（思いつかなかった様子）あ、  
 特技は、ドッジボールです。走るのが好  
 きです、よろしくお願いします」  
 風香 ・鮎、倉田、拍手。  
 風香 「（私から、と合図して）春名風香です  
 。35歳です。趣味は、映画鑑賞です。  
 よろしくお願いします」  
 鮎 「浜崎鮎です、浜崎あゆみから一文字抜  
 いてます。趣味はカフェ巡りです。よろ  
 しくお願いします」  
 里奈 風香、里奈、倉田、拍手。  
 里奈 「浜崎あゆみとか久々に聞いた：え、聞  
 くんですか？浜崎あゆみ」  
 鮎 「いや、あんま聞かない：（笑）」  
 里奈 「なんだそれ（笑）：次、倉田さん」  
 倉田 「なんで？なんで？え：？倉田誠一です  
 。趣味は、書道を習ってます（笑）」  
 里奈 「え、意外」  
 倉田 「よろしくお願いします（笑）：ねえ何  
 の時間？これ要る？」  
 里奈 「一同、ひとしきり笑って  
 けど（笑）、倉田さんマジ助けて（笑）  
 本当に、え、ヤバい何も話すことない、  
 あ！え、なんかさ、朱音ちゃんと同級生  
 ！」



鮎 「ありそうそうそう！私もここの出身で  
 ー  
 里奈 「ね、激アツ、え、朱音ちゃんと仲いい  
 倉田 「うん、あの、里親登録って言って里親  
 になるために色々研修：里親になるのに  
 必要な：技術？みたいな」  
 里奈 「え？アツ。倉田師匠？」  
 倉田 「（笑って首を横に振る）」  
 鮎 × × ×  
 「このカレーってさ、10年前と変わ  
 ってない？」  
 倉田 「いやまあ変わってはいると思うよ」  
 里奈 「え、鮎ちゃんも食べた？カレー」  
 鮎 「食べた食べた」  
 里奈 「ぶっちゃけ、どう？」  
 鮎 「どうって、まずいか？」  
 里奈 「うん」  
 鮎 「え：不味い」  
 里奈 「それな、あの、甘すぎる」  
 鮎 「わかる！」  
 風香 「え、私甘い好き」  
 里奈 「え」  
 鮎 「この人ね、カレーにジャム添えてるの  
 ー  
 里奈 「え？」  
 鮎 「辛いのだめだから」  
 里奈 「え？ヤバ？可愛い。ギャップ萌え」  
 × × ×  
 ○43 同・一時保護所（前） 夕方  
 朱音と一緒に手を振る里奈。  
 風香、鮎、倉田も手を振り返しながら  
 去っていく。  
 風香 「良かった」  
 鮎 「なんとかね」  
 風香 「凄い元気な子で良かったです」  
 鮎 「ホントだね、私の時と大違い（笑）」  
 倉田 「本日は、面会お疲れさまでした。まあ  
 無事打ち解けられたようでは、一安心

です。ね：まあ、多分、見ての通り本人凄  
 明るいんですけれど、どっかで無理していると  
 こもあると思うので、その辺お互いちゃん  
 と気を使っているようにしましう。年  
 齡が高いので、面会から外泊まではスー  
 ズにいくと思ひますが、難しい時期なので  
 お互い焦らず、慎重にいきましょう。本日  
 はお疲れさまでした」

風香・鮎「お疲れさまでした」

○ 4 4 風香のマンション・リビング 夕方

花柄のエプロンを着て、見せびらかす

鮎「どう？」

風香「セカイイチカワイー（棒読み）」

鮎「ありがとう（笑）」

風香「うーん、緊張する？」

（チャイムの音）

風香「はい」

風香、鮎より一足先に玄関へ。

○ 4 5 同・玄関 同

風香、少し緊張した面持ち。

笑顔を作ってドアを開ける。

風香「こんにちは」

ドアの外には倉田に連れられた里奈が  
 待っている。

里奈「こんにちは！（風香に抱き着く）」

風香「（驚いて）わーびつくりした」

倉田「（笑顔で）こんにちは」

風香「どうぞ」

倉田「お邪魔します」

里奈「お邪魔します、鮎ちゃん！」

鮎「わー、こんにちは」

里奈「エプロン！可愛い」

鮎「でしよ」

倉田「お二人、中で少しお話ししましょうか」  
 鮎と風香、頷く。

里奈「…」

○ 4 6 同・リビング 同 里奈。

鮎 「これ自由に食べているから」

方へ。里奈は疎外感を感じたのか、寂  
しそうな表情に。

○ 4 7 同・洗面所（内） 同

倉田 倉田、風香と鮎にプリントを配布し、  
心構えについて話している。

倉田 「里奈ちゃんにも説明したんですが、里  
奈ちゃんには『子ども権利ノート』と  
いうものを持たせておりまして、何かあ  
ればそこに書き込んで、我々やお二人と  
対策を練ることが出るという風に伝え  
ておりますので、よろしく願います」

風香 鮎「はい」  
倉田 「また、お二人何か困ったことや大変な  
ことなどあれば、我々児童相談所やこう

ざいますので、気軽にご相談ください。  
では、後日また改めて伺いますので、短  
い間で、よろしく願います」  
風香 鮎「よろしく願います」

○ 4 8 同・リビング 同

ぐつぐつと煮込まれたカレーの鍋。  
風香と里奈は楽しそうに話をしながら  
二人でジェンガをしている様子。  
キッチンに鮎、カレーを味見し満  
足げな表情。  
風香がドキドキしながらブロックを抜  
き、ジェンガが倒れる。  
風香が顔を抑えて「あゝ」と悔しが  
り、里奈は満足げな表情。ふと里奈は鮎  
の方に視線をやり、おもむろにキツチ  
ンへ。風香はその様子を眺めている。

里奈 「ねえ」  
 鮎 「ん？」  
 里奈 「なんか手伝うことない？」  
 鮎 「ん、じゃあさ、野菜切ったことある？」  
 里奈 「え、：（少し考えて）ない」  
 鮎 「なるほどと言わんばかり頷いて、里奈をキッチンに手招き。」  
 鮎 「今からキュウリの切り方教えるからちよつとやってみて」  
 里奈 「はい」  
 鮎 「風ちゃんフライヤー見てて」  
 風香 「うっす」  
 鮎 「風香、フライヤーの前に。」  
 鮎 「見てて、まずこうやって手を猫の手にします、にやお」  
 里奈 「にやお、ふひひっ（笑）」  
 鮎 「で、手を怪我しないように猫の手で抑えて、ストンって切る。この時出来るだけ包丁のお腹の部分で切るように」  
 里奈 「へー」  
 鮎 「ちよつと、やってみよっか」  
 里奈 「包丁を握っておそろおそろキュウリを切る。徐々にわかってきたのか、少しスピードが速くなる。」  
 鮎 「おお、お上手！」  
 風香 「ちよつとお姉さん、お姉さん」  
 鮎 「ん？」  
 風香 「これいつ肉入れる感じ？」  
 鮎 「え、あの箸入れてさ、ジュワってなったらもう（入れちゃって）」  
 風香 「え？」  
 鮎 「（里奈の包丁さばきを見ながら、ジャイモを電子レンジに入れる）そう、そう、（肉を揚げる音、少し大きい）」  
 風香 「アツツ！（大きな声）」  
 里奈 「びっくりしたー」  
 鮎 「大丈夫？ちよつと交代」  
 風香 「マジで熱かった」

里奈「聞いたことない声だったよ（笑）」  
 鮎「ほら風ちゃん、冷蔵庫開けてマヨネー  
 ズと玉ねぎとって。あとチン出来たらジ  
 ヤガイモ取り出してそのボウル入れて  
 皮剥く」  
 風香「いじわるう（可愛い声で）」  
 鮎「今日ぐらい働け（笑）、里奈ちゃん手  
 止めない！」  
 里奈「すいません！（笑）」  
 × × ×  
 テーブルの上に並べられたカレー、唐  
 揚げ、ポテトサラダ。  
 風香・鮎・里奈「いただきます」  
 鮎「どう？おいしい？」  
 里奈「施設のよりおいしい」  
 鮎「ほーやったり！え？風香さん？大丈夫  
 ですか？」  
 風香、口を抑えている。辛かった模様  
 。  
 鮎「ジャム入れ忘れたの？」  
 風香「大人なとこ見せようと思って」  
 鮎「言っとくけどそれいつもより辛いから  
 ね（笑）」  
 × × ×  
 風香、鮎、里奈、3人でランプ、ババ  
 抜きをして遊んでいる。  
 × × ×  
 3人で洗い物をしている。棚の上にはマ  
 グカップが二つ。  
 里奈「…ねえ」  
 風香「うん？」  
 里奈「もしさ、私がこの家に、その、里子？  
 として来たとしてさ、二人はその一応、  
 結婚してるってことなわけじゃん？」  
 風香「うんまあ、（指輪を見せる）」  
 鮎「ドやるなウザイぞ（笑）」  
 3人とも少し笑って、  
 風香「それでそれで？」  
 里奈「ああ：いや、どっちがお父さんになる  
 のかなって」

鮎 「少し考える」  
 風香 「：あゝはいはい」  
 里奈 「結婚式でさ、二人ともウェディングドレス着るの？それともどっちかタキシード？」  
 風香 「なるほどね、まあどっちがハンサムかつてね、ことだよね」  
 里奈 「（笑いながら首を振る）」  
 鮎 「違うわバカタレ（笑）」  
 風香 「えゝどっちだろ？いやでも基本的にはさ、私だよね」  
 鮎 「うんまあ私もそう思ってる」  
 里奈 「え？なんで？」  
 風香 「なんで？：あゝ顔？」  
 鮎 「絶対違う（笑）絶対違う」  
 風香 「えゝじゃあ試しに鮎、お父さんやってみて」  
 鮎 「え？」  
 風香 「なんか、お父さんっぽいこと、言ってみて（笑）」  
 鮎 「えゝ」  
 風香 「3、2、1、（どうぞ、と）」  
 鮎 「（低い声で）：おい、飯はまだか？」  
 風香 「：（最初は笑いをこらえていたが、徐々にこらえきれず）ぶはははははははははは（笑）」  
 鮎 「最低（笑）」  
 里奈 も笑っている。  
 × × ×  
 鮎 「さっきの：」  
 風香 「ん？」  
 鮎 「どっちがお父さんかって」  
 風香 「ああ：」  
 鮎 「やっぱ風ちゃんだと思っよ」  
 風香 「：」  
 鮎 「いやまあ、無理して決める必要ないんだけどね：」  
 風香 「うん」

風香「：病気分かった時さ」  
 鮎「うん」  
 風香「やっぱいいや、寝よ」  
 と言い風香は酒を飲み干す。鮎も同じよ  
 うに飲み干して寝室へ。  
 ○ 4 9 同・ベランダ 昼  
 鮎が洗濯物を干しているところに、里  
 奈がやってくる。里奈も手伝う様子。  
 鮎「お、ありがと」  
 黙って物干し竿にかける里奈。  
 里奈は突然タオルの匂いを嗅ぎ始める。  
 鮎「：？タオル臭い？」  
 里奈「ううん、いい匂い、鮎ちゃんも」  
 鮎「えゝ柔軟剤いつもと変わんないけど  
 （匂いを嗅ぐ）：いい匂いではある」  
 里奈「えゝ何それ」  
 鮎「嗅ぎ慣れてるから」  
 里奈「うわ、マウントだ：えい！（と鮎の頭  
 にタオルをかぶせる）」  
 鮎「わあゝやったなゝえい！（鮎も里奈に  
 シヤツを被せようとする）」  
 ひとしきり楽しそうに笑っていると、  
 呼び鈴が鳴る。  
 鮎「倉田さんかな？」  
 鮎、そういつて玄関の方へ。  
 里奈は少し寂しそうな表情になる。  
 ○ 5 0 倉田の社用車（内） 同  
 倉田の車に乗せられている里奈。  
 車の外には手を振る風香と鮎。手を振  
 り返す里奈。車が発する。段々と二  
 人の姿が遠ざかってきたころ。  
 倉田「どう？楽しかった？」  
 里奈「：ママは？」  
 倉田「：」  
 里奈「ママとはいっ暮らせるの？」  
 倉田「それは、まだなんとも：」

|       |        |   |   |   |   |                   |                |                    |                    |       |   |                   |                   |                   |           |                   |       |   |    |   |   |   |    |   |              |                   |              |       |   |               |   |                   |       |   |        |   |   |    |    |   |    |       |           |               |                   |       |               |   |         |                   |               |                   |           |                      |             |
|-------|--------|---|---|---|---|-------------------|----------------|--------------------|--------------------|-------|---|-------------------|-------------------|-------------------|-----------|-------------------|-------|---|----|---|---|---|----|---|--------------|-------------------|--------------|-------|---|---------------|---|-------------------|-------|---|--------|---|---|----|----|---|----|-------|-----------|---------------|-------------------|-------|---------------|---|---------|-------------------|---------------|-------------------|-----------|----------------------|-------------|
| ○ 5 6 | 同・リビング | 同 | × | 鮎 | × | 里奈はポップコーンを食べたり、時々 | 鮎は涙を浮かべている。風香と | 「タイタニツク」を見ています。風香と | ソファに座り、3人で映画を見ている。 | ○ 5 5 | × | りに気づいた鮎が笑って止めに来る。 | をスマホで隠し撮りしている。隠し撮 | 里奈と風香で、静かに海を見つめる鮎 | たりして遊ぶ里奈。 | 線香花火をする3人。花火を振り回し | ○ 5 4 | × | 海辺 | 夜 | × | 鮎 | 「」 | × | 繋いだり、腕を掴んだり。 | 里奈は時々、風香に甘えるように手を | 3人で買い物をしている。 | ○ 5 3 | × | デパート・総菜売り場（内） | × | 風香、鮎、里奈、3人でおにぎりを握 | ○ 5 2 | × | 同・キッチン | 朝 | × | me | ng | u | ng | が流れる。 | ボ・ディランの「」 | る。そして再び仕事に戻る。 | 戻ってきた風香、スマホで音楽をかけ | ○ 5 1 | 風香のマンション・仕事部屋 | 同 | 倉田「：了解」 | 寂しさと哀しさを帯びた里奈の表情。 | 道路を走っていく倉田の車。 | 倉田「：7日にして、一番長いやつ」 | 里奈「：3日とか」 | 倉田「：次の外泊、どうする？もっと長くす | 里奈「またそれじゃん」 |
|-------|--------|---|---|---|---|-------------------|----------------|--------------------|--------------------|-------|---|-------------------|-------------------|-------------------|-----------|-------------------|-------|---|----|---|---|---|----|---|--------------|-------------------|--------------|-------|---|---------------|---|-------------------|-------|---|--------|---|---|----|----|---|----|-------|-----------|---------------|-------------------|-------|---------------|---|---------|-------------------|---------------|-------------------|-----------|----------------------|-------------|



3人でジェンガをしている。  
里奈がブロックを抜いて、ジェンガの  
塔が崩れる。悔しそうな里奈。  
3人とも楽しそうに笑っている。

○ 5 7 遊園地（内） 昼

風香、鮎、里奈、朱音の4人で遊園地  
に来ている。  
風香と里奈はジェットコースターに乗  
り、下にいる2人に手を振る。2人も  
手を振り返す。

朱音 「なんか、あつという間だね」

鮎 「ね、よかつたの？、休日なのに」

朱音 「ホントはあんまり、よくないね」

鮎 朱音、シートと指を口に当てる。

鮎 「明日から委託開始でしょ？なんか実感  
わかない」

朱音 「そーかな？私はキミがちゃんと母親や  
つてる方がわかんない」

鮎 「いやいやいや（笑）、母親なんてまだ  
まだだよ。なんか、お母さんになれる気  
がしない」

朱音 「今ぐらの時期だっけ？鮎のお母さん  
が蒸発したの」

鮎 「うん」  
朱音 「そんで10歳にして万引きで児相送り  
でしょ？今思えば私たち、よく大人にな  
れたよね」

鮎 「朱音も大概でしょ」  
朱音 「まあね」

鮎 （ジェットコースター乗客の悲鳴）  
「里奈ちゃん、昔家族3人で来たんだっ  
て。ここ。倉田さんが言ってた」

朱音 「へー」

○ 5 8 風香のマンション・リビング 夜

（テ）「10月」  
二人で洗った物をしている鮎と里奈。  
洗い終えたマグカップを拭いて、棚に  
しまう。棚のマグカップが3つに増え

ている。

風香の声「（玄関のドアが開く音）」

鮎・里奈「おかえり」  
風香、買い物袋を提げてリビングのド

アを開ける。  
それを見るなり里奈、風香に飛びつく。

風香「ただいま」  
里奈「おかえり」（抱き着く）

風香「わくあったかい」  
里奈「服めっちゃ冷たい」

鮎「冬だね」  
風香「ただいま（買い物袋を渡す）」

鮎「おかえり、今日は鍋だよ」  
里奈「やった」

風香「ありがたき幸せ」  
× × ×

鮎、鍋のふたを開けるとぐつぐつと煮  
えた味噌鍋が。

里奈「おう（拍手する）」  
風香「いい匂い」

鮎「いっぱい食べて」  
里奈「いただきます」

風香・鮎「いただきます」  
里奈「肉や野菜など多くの量を取る。」

風香「おお、いくねえ」  
鮎「熱いから気を付けて」

里奈「フーフーして鶏肉を食べる。し  
かし熱かったのか、ハフハフ。」

鮎「大丈夫？熱い？あつい？」  
里奈「無言で親指を立てる。」

風香と鮎、フツと微笑む。

○ 5 9 同・洗面所（内） 同  
スイツチを押し、洗濯機を回す鮎。

鮎、血相を変えてトイレの方へ。

○ 6 0 同 トイレ（前） 同  
鮎、トイレのドアをノックする。

鮎 「里奈ちゃん？大丈夫？」  
 里奈 「（苦しそうに）大丈夫：ちよつと、食  
 べ過ぎ：（再び嘔吐）」  
 風香 「大丈夫？」  
 鮎 「なんか、食べ過ぎたみたい」  
 里奈の嘔吐する声が響く。  
 ○ 6 1 同 リビング 同  
 風香は一人落ち着かない様子。  
 鮎が戻ってくる。  
 風香 「大丈夫だった？」  
 鮎 「うん、もう寝るって」  
 風香 「そっか：なんか、無理に食べさせちゃ  
 ったかなって」  
 鮎 「（首を横に振って）嬉しかったんじや  
 ない？あっち（児童相談所）だと鍋とか  
 あんまり出ないから」  
 風香 「：そう、だよね：」  
 ○ 6 2 千里の夢  
 千里の声「♪シャボン玉飛んだ屋根まで飛  
 んだ屋根まで飛んで壊れて消えた」  
 里奈と貞夫と、家族3人でシャボン玉  
 をして遊んでいる里奈の姿。  
 夢から覚めた千里、目が覚めるところこ  
 はアパート。目には涙が浮かんでいる。  
 ○ 6 3 コンビニ（内） 昼  
 風香と鮎がコンビニで水やお菓子を買  
 う中、里奈はシャボン玉セットを眺め  
 ている。  
 鮎は里奈の方を見つめて：  
 ○ 6 4 遊園地・レストラン（内） 昼  
 料理を待っている風香、鮎、里奈。  
 里奈は買ってもらったシャボン玉セッ  
 トを手にも、窓の外の楽しそうな親子連  
 れを見ている。  
 里奈 「ちよつとトイレ」  
 と言って席を立つ。

里奈「：！」  
 里奈がトイレを探していると、窓際の席に千里の姿を発見する。

里奈「へ、鮎に気づいて：！」  
 鮎「：！」  
 鮎「今、これ、落としてたから」  
 里奈「：！」  
 鮎「今のって、里奈ちゃんの：！」  
 里奈「関係ない、人違いだったから」  
 鮎「：！」  
 鮎「あれは多分、そうだと思います」

〇 6 5  
 風香のマンション・リビング 昼  
 倉田「：うくん、まあ流石にたまたまだと思います。実親さんと里親さんには協力して、うちの基本です、ある程度情報共有はしてありますが、もし不用意な接触が続くようであれば改めてご相談いただけたらなと」  
 風香「あの、里奈ちゃんはその、実のお母さんには会えないんでしょうか？」  
 倉田「会えないことはありますが、ただ、会えたらメンタル面で影響が出ることも考えられますので、慎重に。その後里奈ちゃんには？」  
 鮎「特に変わらな過ぎています。ただ：！」

倉田 「ただ？」

鮎 「いや、まあ大したことじゃないです」

のを使わずに大事そうに持ってるんです。

理由を聞いてもはぐらかすだけで、何か

聞きづらくて。」

倉田 「大丈夫ですよ、いつかきくと話してく

れます。僕たちにはできるのはただ待って

ることだと思います。」

里奈の声 「お母さんの方が好きだから」

○ 6 6 同 夜

突然の里奈の言葉にキョトンとする風

香と鮎。

机の上には食べかけのオムライス。

里奈 「お母さんが作ったオムライスの方が美

味しいから。何倍も、何百倍も」

里奈、そういつて寝室に戻ってしまふ。

オタオタする風香をよそにどこか安心

した様子の鮎。

× × ×

鮎 「いいことじゃん、そういう気持ちぶつ

けられるってことはさ、なんやかんやで

打ち解けてきたってことだよ」

一緒に洗い物をする風香と鮎。

机の上の食べかけのオムライスにラッ

プがかけられている。

風香 「強いね、鮎は」

鮎 「強くなきゃやってこれなかったからね

（と、笑い飛ばす）」

風香 「（ため息をつく）情けない、あの子に

何もしたあげられてない気が。」

とぼとぼとした足音で、里奈がやって

くる。泣きそうな目で二人を見る里奈。

風香・鮎 「！」

里奈、「ごめんね」と伝えようとする

が、上手く言葉が出てこず泣き崩れる。

鮎は微笑みながら、何も言わずに里奈

の背中をさする。

風香 「えっと、あ、お水とか。」

といって風香は冷蔵庫を探る。

○ 6 7 同・風香と鮎の寝室（中）  
風香、いびきを掻いて寝ている。

○ 6 8 同・リビング  
里奈はオムライスを食べ終え、スプー  
ンを置く。

里奈「ごちそうさま：ねえ鮎ちゃん」

鮎「ん？」

里奈「鮎ちゃんてさ、自分のお母さんのこと  
どう思ってた？」

鮎「うゝん、今の里奈ちゃんとあんな変わ  
らないかも」

里奈「え？」

鮎「私もあんまり恨んではなかったかな。  
そりや何度も暴力振るわれたし、ずっと  
家で一人だったけど、自然と離れようと  
は思わなくてさ」

里奈「：じゃあ、好き？」

鮎「：あんまり関わりたくはない、かな」

里奈「：」

鮎「お母さんいなくて寂しい？」

里奈「うん」

鮎「そっか、じゃあ、私は里奈ちゃんのお  
母さんにはなれないかもしれないけど、  
お母さんになる努力は出来るから、今度  
はもうちよっと美味しいオムライス作れ  
るように頑張る」

里奈「じゃあ：里奈って呼んで欲しい」

鮎「うん？」

里奈「里奈ちゃんじゃなくて、里奈って呼ん  
でほしい」

鮎「あゝ：いいよ」

里奈「呼んでみて」

鮎「里奈」

鮎と里奈、顔を見合わせて照れたよう  
に笑う。

○ 6 9 スーパー（内）

買い物にやってきた千里。  
 先に来ていた鮎と里奈を見かける。  
 鮎 「里奈玉ねぎとって」  
 里奈 「はい（玉ねぎを袋に入れ、渡す）」  
 鮎 「ありがと」  
 里奈 「どういたしまして。：ねえ、鮎ちゃん  
 は結婚しないの？」  
 鮎 「え？してるよ？（指輪を見せる）」  
 里奈 「結婚式とかしてないじゃん」  
 鮎 「あゝ、しなきゃって、ものでもないよ」  
 里奈 「えゝ？じゃあしたくないの？結婚式」  
 鮎 「んゝどうかな？里奈は私のドレス姿見  
 たい？」  
 里奈 「見たい見たい！」  
 鮎 「えゝ弱ったなゝ」  
 千里は安心したように微笑んだ後、暗  
 い表情に戻り、スーパ―を出ていく。  
 ○ 7 0 風香のマンション・リビング（内）  
 夜  
 風香 「ソファに座りコーヒ―を飲む風香と鮎。  
 鮎 「へゝ里奈がそんなことを」  
 風香 「うん」  
 風香 「結婚式か、いつかやろうとは思ってた  
 けどな：」  
 鮎 「けど何？お金？」  
 風香 「いやまあそれもあるけど、バタバタす  
 るからさ、里奈を一人にするのが心配で」  
 鮎 「いやまあそれは：信じてみるしかない  
 んじゃない？里奈も一人で留守番できな  
 いってことはないだろうし」  
 風香 「んゝ」  
 鮎 「てかそれよりさ、風ちゃんの場合お母  
 さんの方が問題じゃない？」  
 風香 「：ぐふっ」  
 鮎 「（笑）」  
 風香、思い出したように携帯を取り出  
 して  
 風香 「あゝ、そうそう。昨日里奈のお母さんか  
 らメール来ててさ、面会したいって」

鮎 「へー、珍しい！」  
風香 「普段あんまり連絡とらないからね」

○ 7 1 同・ベランダ 昼  
風香、LINEを送っている。  
「お久しぶりです。風香です。」  
1 2 月 5 日に実家に帰ります。婚約者  
を連れていくので、紹介します。」  
そこまで打って、ため息をつく。

○ 7 2 同・リビング（内） 夜  
晩御飯の用意をしている風香、鮎、里  
奈。

風香 「里奈さ、お母さんに会いたい？」

里奈 「なに？急に」

風香 「あ、いや、里奈のお母さんからさ、里  
奈に会いたいたって連絡が来てて」

里奈 「えっ？」

風香 「もし里奈が合いたって言うなら、児  
相立ち合いのもと、面会を実施しましよ  
うって倉田さんが」

里奈 「二人は、いいの？」

風香 「もちろん、反対なんかしないよ。ね？」

鮎 「うん」

里奈 「！」

風香 「どうしたい？里奈が決めていいよ」

里奈 「：会いたい」

風香 「よし、じゃあお母さんにもそう伝えと  
くね」

○ 7 3 千里のアパート・ベランダ 昼  
洗濯物を干している千里。

（スマホの着信音）

千里、メール画面を見て微笑む。

再び洗濯物を干し始めると、携帯に電  
話がかかってくる。  
千里 「（電話に出て）もしもし？え？」

○ 7 4 風香のマンション・リビング 里奈  
の寝室（内） 朝



○ 7 6 カフェ（内） 朝  
店員 「窓際の席でコーヒーを飲む風香と鮎。  
A でお待たせしました、モーニングセット  
鮎 「お、おしやれ（写真を撮る）」  
風香 「食べよ食べよ、いただきまーす」  
鮎 「いただきまーす」（風香の携帯が鳴る音）

○ 7 5 児童相談所前 朝  
風香の車が児童相談所の前に着く。  
相談所の前では朱音が待っている。  
里奈 「里奈！これ忘れてる！」  
鮎 が里奈にシャボン玉セットを渡す。  
里奈 「行ってきます！」  
風香 ・ 鮎 「行ってらっしゃい！」  
元気に手を振る里奈と朱音。  
風香と鮎も手を振り返して見送る。  
里奈が朱音に連れられて中へ入っていく。  
き、二人は一息ついて車を走らせる。

鏡を見ながら、服を選んでいる里奈。  
リュックサックにはお菓子やトランプ  
が詰め込まれている。  
里奈はリビングにいる鮎のところまで  
走っていく。  
鮎 は里奈にお弁当を作っている。  
里奈 「ねえねえ、どっちが似合うと思う？」  
鮎 「えー？」  
風香 「（里奈のリュックを見て）ねえこれ入  
れすぎじゃない？」  
鮎 「いいの、（鮎に）ねえどっち？」  
風香 「どんな服でも、お母さん喜ぶと思うよ」  
里奈 「うるさい風ちゃんには聞いてない」  
風香 「ひんっ（泣）」  
鮎 「私はこっちな」  
里奈 「ありがとーう！」  
鮎 「早く着替えちゃってね！」  
風香、里奈の姿を見て微笑む。

風香「…？ちょっと出てくる」  
鮎「うん：」

○ 7 7 同（外） 同  
風香「あ、もしもし？…あ、倉田さん。どうか  
なさいましたか？」

○ 7 8 風香の車（内） 同  
倉田「急いで車を走らせる風香と鮎。  
の間、倉田です。今面会の時間過ぎてるんで  
すけれども、千里さん、里奈ちゃんのお  
母さんがまだ来られてなくてですね、あ  
の、こちらからも電話していません、もし  
れども連絡が取れない状況です、もし  
よろしければそこから千里さんの方  
にお電話していただけると助かります：」  
（電話をかける音）

○ 7 9 児童相談所・相談室（内） 昼  
里奈は不安そうな表情で待っている。

○ 8 0 同 廊下 同  
風香と鮎が速足でやってくる。倉田も  
やってくる。  
倉田「ああ、風香さん、鮎さん、呼び立てし  
て申し訳ありません」  
風香「それはいいです、里奈は？」  
倉田「相談室の方に」

倉田「3人で相談室に向かう。  
倉田「その後何か連絡はありましたか？」  
風香「（携帯を見ながら）いえ、まだ：」  
風香「足を止める。」

鮎・倉田「：？」  
風香「：今：（携帯の画面を見せる）」  
倉田「：里奈ちゃんに、伝えてきます」

倉田「相談室に一人向かう。  
少しして、里奈の慟哭の音が響く。  
風香も鮎もやるせない表情を浮かべる。」

○ 8 1 風香のマンション・里奈の寝室（内）  
夕方

憔悴しきった様子の里奈。

○ 8 2 同・リビング 同

風香も鮎も暗い表情でいる。

（ガラスが割れる音）

風香・鮎「！」

二人とも里奈の寝室へ急ぐ。

○ 8 3 同・廊下 同

寝室のドアが開いており、中から里奈が出てくる。腕は血だらけでガラスの破片が刺さっている。寝室は荒れっぱなしで、スタンドミラーが割れている。

風香「！」

鮎「……里奈……」

鮎が心配して里奈に近寄るも、里奈はそれを振りほどき、走って家を出て行ってしまふ。

鮎「里奈！」

鮎、靴も履かずに里奈を追いかける。風香も遅れて追いかける。

○ 8 4 同・階段 同

わき目も振らずに階段を下りる里奈。

鮎の声「里奈！待って……」

（人が転げ落ちる音）

里奈「……？」

里奈、おそるおそる戻ってみると、そこには血を流して倒れる鮎の姿。急いで降りて来た風香、鮎の姿を見るなり血相を変えて

風香「……鮎？……鮎！鮎！……」

里奈は無言で立ち尽くしている。

○ 8 5 病院（内） 夜

憔悴しきった様子で座っている風香。手術室から看護師が出てきて

風香「あの：鮎は？」  
 看護師「えっと、鮎さんのご親戚ですか？」  
 風香「いえ、えっと、婚約者です」  
 看護師「：すみません、親族ではない人には、  
 ちよつと教えられないので：」  
 風香「：そうですか」  
 看護師「頭を下げて早く去っていく。」  
 風香は無力に涙を流す。  
 × × ×  
 風香、倉田、朱音の３人で鮎と里奈の  
 手術が終わるのを待っている。  
 そこに息を切らしながら千里がやって  
 くる。  
 千里「：里奈は？」  
 倉田「まだ何も：」  
 千里「千里、風香の胸ぐらにつかみかかって  
 なあ！何したんだよ！メエ！」  
 倉田「落ち着いて！落ち着いて！」  
 風香「：あなたこそ何してたんですか？」  
 千里「：あ？」  
 倉田「風香さん：」  
 風香「里奈は、あなたに会いたがってたんで  
 すよ？あなたに会ったのをずっと楽しんで  
 してたんです。朝からワンピースを選んで  
 お菓子まで買ったりして！その気持ちも  
 踏みにじったんですよ！あなたそれでも  
 母親なんですか？」  
 倉田「風香さん！：（首を横に振る）」  
 朱音「何で、来なかつたんですか？」  
 千里「：？アンタ誰？」  
 朱音「児童相談所の者です、何かあったんで  
 すか？」  
 千里「：夫が」  
 朱音「え？」  
 千里「夫がお金貸してほしいうから、  
 貸したんです。この金でまた一からやり  
 直して３人で暮らそうって。そしたらア  
 イツ、その金全部競馬とキャバクラに使

風香「ん？」

里奈「ママの話、していい？」  
 風香「いいよ」  
 里奈「昔ね、ママとパパと3人で公園でよく  
 シヤボン玉して遊んだ。あの頃はマ  
 マもパパも今より元気でさ、今よりずっ  
 と：明るくて？：だからさ、いつかママ  
 があの頃みたい？：だかになつて、あの頃  
 みたい？：信じてるの」  
 風香「うん」  
 里奈「ママね、私が4歳の時にお腹の中に赤  
 ちゃんが出来た。里奈に弟が出来る  
 よつて、嬉しそうに。パパも私も弟が生  
 まれるの楽しみにしてたんだけれど、ある  
 日突然、お母さん事故に遭つてさ、お母  
 さん『弟ダメになっちゃった』つて、  
 『ごめんね』つて。その日からお母さん  
 がちよつとずつとおかしくなつていつて、  
 そしたらパパも会社クビになつたつて言  
 つて、毎日お酒ばかり飲むようになって、  
 て：（下を向く）こんなこと言つても風  
 ちゃん信じないかもしれないけど、里奈  
 のママ、本当は優しい人なの、里奈のパ  
 パも、本当は優しい人なの、だから、風  
 ちゃん、鮎ちゃんのこと、大好きつて思  
 う度、ママとパパのこと裏切つてるんじ  
 やないか？：ついでと：だから会えるつ  
 て聞いたから、つい嬉しくなつちやつた  
 だ：ごめんね、こんなことして」  
 風香「：そっか、じゃあさ、次は私のママの  
 話、していい？」  
 里奈「（無言でうなづく）」  
 風香「私が里奈ぐらいの歳の頃さ、生理がこ  
 なく、病気がちやつて、病院で診てもら  
 ら、病気がちやつて、病院で診てもら  
 ぼ出来なかつて。それ言われても、当時は  
 そんなに悲しくなかつた。お母さんが病  
 さんが泣いてたりとお母さんが病気が  
 治るための変な祈りとかお母さんが病  
 相当ヤバい変な祈りとかお母さんが病

○ 8 8 同・披露宴会場（内） 昼

の姿を見て黄色い声援を浴びせる。  
 キシードを試着している。里奈は二人  
 鮎はウェディングドレスを、風香はタ  
 鮎、里奈。  
 プライダルフェアに参加している風香、  
 式場の窓に日差しが差し込んでいる。  
 （テ）「12月」

○ 8 7 結婚式場・試着室（中） 昼

風香「疲れちゃった、もう寝よう」  
 里奈「：うん」

うと、里奈が大好き」  
 風香「はにかんだ笑みを浮かべる。  
 里奈はただ、その表情を見つめる。  
 幸せでいてほしい。鮎も私もわがままな  
 んだ！ってね。だからさ、何が言いた  
 かって、私たちには里奈がどんなやつ  
 と同じ、私も鮎も里奈にあの頃の自分  
 をしてもらえなかったから。だって私は  
 んな子でも、愛してる。だって私はそ  
 しようにしてもらえなかったことを他人  
 自分が出会って解った気がする：鮎も  
 奈と出会うおばさんだから。でもさ、里  
 いい歳したおばさんだから。でもさ、里  
 大好きだっと思っただ。ほら、私は鮎  
 う？」って思っただ。ほら、私は鮎  
 たまに「なんだ」って私は選んだ。私さ、  
 しかったんだ」って私は選んだ。私さ、  
 娠でできない自分をも受けて入れてほ  
 今まで悲しかったんだ」って：「私は妊  
 っで育てて一人前なのに何言ってるの！  
 んで育って一人前なのに何言ってるの！  
 りとか家族にもう無理して治療とかお祈  
 だから家族にもう無理して治療とかお祈  
 のままでもいいって、どっかで思ってた、  
 って欲しいとは思ってたけど、なんか病

試食の時間に座って牛肉のステーキを食べている風香、鮎、里奈。

風香 「ん！すごい柔らかい」

鮎 「ね！え、どうですか？里奈シェフ？」

里奈 「正直言っている？」

鮎 「うん」

風香 「いいよ」

里奈 「さっきの式場との違いが分かんない」

里奈 「てかさ、大爆笑。」

風香 「やるもんじゃないの？」

里奈 「あゝ地元のとどこも同性NGでさ」

風香 「あゝそういう」

○89 風香のマンション・リビング（内）

倉田 「家庭訪問にやってきた倉田。」

風香 「まあぼちぼちですか？里奈ちゃん」

鮎 「結構馴染んで来たよね」

倉田 「あゝそうですか、それはよかった」

風香 「ご両親の方はどうですか？」

倉田 「一応定期的に訪問はしてるんですが『会いたい』とは……」

風香 「うゝん！」

鮎 「そういえば里奈、来月誕生日だよな」

倉田 「まあそうですね：会わせてあげたいのはやまやますが、会うとお互いに不安定になる可能性が高いですから：千里さんの方も少しずつではあります：回復に向かって言っているのです：」

鮎 「ええ、それはよかった」

風香 「この前みたいになるのも怖いですが：でも里奈が会いたいのって思うなら：ぐう（頭を抱える）」

倉田 「：まあなんにせよ、施設に入ってから初めの誕生日ですから、盛大に祝ってあげてください」

鮎 「ですわね」



○ 9 0 千里のアパート（内） 昼  
少し片付いたアパートにいる千里。  
倉田の声「はいもしもし、浦町児童相談所の倉田です」  
千里「もしもし、及川里奈の母親の及川千里です」  
倉田の声「ああ、千里さん、お電話ありがとうございます。本日はどういったご用件でしょうか？」  
千里「あの、お願いした面談の件どうなりますか？」  
倉田の声「：単刀直入に申し上げて、今の時期は難しいかと」  
千里「そう、ですか：えっと、いつなら：？」  
倉田の声「うゝんはつきりとした時期までは申し上げられませんが、千里さんも里奈さんも現状を回復するまでといった感じでしょうか」  
千里「：そうですか」  
倉田の声「あ、千里さん、諦めないでください。里奈ちゃんの方もお母さんに会いたくないというのではないと思うので：」  
千里「じゃあ：」  
倉田の声「それでも、お互いに会えば不安定になるリスクがあります。当相談所としても、以前の事もありますし、まずはお二人の回復が第一優先ということですから。どうかご理解ください」  
千里「：わかりました、失礼します」  
千里「千里、電話を切って座り込む。」  
（着信音）  
千里「千里、再び電話を取る。」  
男 A 「もしもし、及川千里さんの携帯でお間違いないでしょうか？」  
千里「はい：」

男 A 「私先日及川さんの面接を担当しました  
根岸という者です。先日は面接にお越し  
千里 「ああ、いえ！」  
根岸 「協議の結果、残念ながら今回は採用見  
送りと言うことになりました。ご希望に  
添えず誠に申し訳ありません。今後の及  
川様のご活躍を！」  
千里 「無言で電話を切る。」  
無言で傍の段ボールを蹴り、外へ出る  
千里。

○ 9 1 デパート・化粧品売り場（中） 昼  
化粧品を探している鮎と里奈。  
鮎 「里奈は心ここにあらずといった様子。  
ネットクレスとか化粧品とか！」  
里奈 「あ、ごめん、ちょっとトイレ」  
鮎 「場所分かる？」  
里奈 「大丈夫！」  
里奈は鮎の目から離れた場所へ。

○ 9 2 公衆電話（内） 同  
公衆電話に着いた里奈。  
ポケットから紙を出し、受話器を上げ、  
お金を入れ、紙に書かれた電話番号を  
入力する。  
（電話の呼び出し音）

○ 9 3 警察署（内）  
血相を変えた様子の鮎が署内を走って  
やってくる。  
署員 「：浜崎鮎さんですか？どうぞ中へ」  
鮎 「はい！」  
先に着いていた風香、倉田、朱音がやっ  
てくる。息を切らしている鮎。  
風香は鮎の背中をさする。

○ 9 4 遊園地・観覧車（内） 夕方  
千里と里奈、観覧車に乗っている。

どこか穏やかな表情の千里。  
 里奈「（楽しそうに）ねえ見てママ、あそこ、  
 千里「わーすごい。里親さんってお金持ちな  
 里奈「うん、風ちゃんゲームは弱いけど、バ  
 千里「そっか：里奈」  
 里奈「？」  
 千里「里奈はママと里親さん、どっちが好  
 き？」  
 里奈「え？そんなのママに決まってるよ。ど  
 うしたの急に？」  
 千里「：そっか：千里、ごめんね。お母さん  
 里奈「え：？」  
 里奈「千里、近くのカバンから包丁を出す。  
 千里「（泣き笑いのような表情）」  
 ○ 9 5 警察署・待合室（内）  
 静かに祈っている鮎。朱音は鮎の傍で  
 付き添い、風香と倉田は神妙な表情を  
 浮かべている。  
 鮎「あの時だよ：」  
 朱音「え？」  
 鮎「遊園地のレストランで、やっぱり人違  
 いじゃなかったんだ。ちゃんと聞いとけ  
 ば：（顔を抑える）」  
 朱音は鮎の背中をさする。  
 警官「皆さん！」  
 警官「一同の視線が警官に向く。  
 倉田「千里さんは？」  
 警官「包丁持って心中しようとしたところ  
 を、なんとか間一髪」  
 × ほっと一息つく一同。  
 × × ×

○ 9 6 児童相談所・相談室（内） 昼

女性警官に連れられ、里奈がやってくる。里奈の下半身が尿で湿っている。鮎と風香、里奈を抱きしめる。

鮎「良かった！」

警官の声「遊園地で電話番号書いた紙渡されて、それで！」

取調室から千里が出てくる。警官たちに連れられる千里。すると突然男が現れ、声を荒げて千里につきみかかる。

男は千里の夫、貞夫（35）。

貞夫「おいテメエこのクソアマゴラア！ テメエ殺すぞボケが！ 自殺未遂とか舐めてんじゃねえぞゴラア！」

貞夫は警官たちに取り押さえられる。

千里「パパ！」

貞夫「：里奈、おうなんだよ元氣そうじゃねえか、え？ いや良かったハハハ、え？ 何だお前漏らしてんじゃねえか？ え？ いくつだよ氣持ち悪い（笑）」

と、里奈の頭を撫でる貞夫。

風香らは呆然としている。

× × ×

倉田と口論している貞夫。

貞夫「だからさ、普通に里奈返してくんねえかって言ってるんだよ」

倉田「貞夫さんまずどこに住んでるんですか？」

貞夫「札幌のアパートだよ。なんなら見るか？ マイナンバー（取り出して見せる）ほら！ な？」

倉田「じゃあ貞夫さん、里奈ちゃんを返すにままず手続きがいるんです」

貞夫「だから手続きってなんだよ？ 俺金溜まつたんだって。何なら後で通帳見してやるよ」

倉田「そういうことじゃなくてですね！」

風香、鮎、里奈「：」

風香「：ちよっと待ってください、急に返せ  
 様子。倉田。」  
 風香「お気持ちわかります、ですが審査の  
 結果、貞夫さんは里奈ちゃんを育てる能  
 力ありと判断されたんです。拒否する権  
 利はありません」  
 風香「そんなこと言っちゃって、そもそも父親  
 は育児放棄してたんですよ？それはどう  
 なるんですか？」  
 倉田「：罪になるかどうかは何とも言えませ  
 ん。貞夫さんが千里さんや里奈さんの事  
 で追い詰められていたのは事実ですし、  
 実際お金を貯めていたのも事実です」  
 風香「なくなったら：？」  
 倉田「え？」  
 風香「またお金がなくなったら、どうなるん  
 ですか？」  
 倉田「：（ただ首を横に振る）」  
 ○ 9 7 同 廊下 同  
 施設の子供たちと楽しそうに遊ぶ里奈。  
 廊下の窓からその姿を見る風香と鮎。  
 鮎「誕生日は、盛大に祝ってあげよ」  
 風香「：うん」  
 風香「鮎、里奈の声」♪ハッピーバースデー  
 ウーユー」  
 ○ 9 8 風香のマンション・リビング（内）  
 夜  
 綺麗に飾られた家、ろうそくが立った  
 バースデーケーキ。初めて来た人同じ  
 カレ、唐揚げ、ポテトサラダ。  
 風香、鮎、里奈「♪ハッピーバースデー」  
 ユー「ハッピーバースデー」  
 ユー「ハッピーバースデー」  
 鮎「おめでとー！」  
 風香と鮎の拍手に包まれて里奈はケーキ

のろうそくを吹き消す。  
里奈は嬉しさのあまり泣いてしまう。  
風香もつられて泣く。  
鮎「なんで風ちゃん泣いてんの？（笑）」

○ 9 9 同・風香と鮎の寝室（内） 同

風香「寂しいね、もう今月でお別れなんだよ」

里奈「ちよっと、言わないで」

風香「ごめん（笑）」

里奈「もう：私さ、二人の事ずっと忘れないよ」

鮎「私も、里奈の事、ずっと忘れない」

風香「私の事も忘れないでね」

鮎「イヤでも思い出すわ（笑）」

3 人の笑い声。  
机の上には「里奈へ」と書かれた手紙と二つのプレゼントが置かれている。

○ 1 0 0 風香のマンション前 朝

倉田の車に乗せられていく里奈。  
風香と鮎、それを見送る。

里奈「：じゃあ、（また）」

「また」と言いかけて、もう会えないことを考え、言葉に詰まる里奈。結局ただ笑って手を振る。

風香も鮎も無言で見送る。  
倉田の車が走り去っていく。

風香「じゃあ、戻ろっか」

風香が戻ろうとすると、鮎は泣き崩れる。  
風香は黙って鮎の背中をさする。

○ 1 0 1 パチンコ屋（内） 昼

（テ）「1 月」

台の前でたばこを吸いながらスロット

を打つ貞夫。揃わずにイライラしてい

るのか、貧乏ゆすりが目立つ。

パチンコ屋の前を里奈が通りかかる。

パチンコに興じる父親を見ながら、  
コンビで買ったおにぎりを食べる。

○ 1 0 2 風香の車・車内 昼  
海沿いの道を走る風香の車。  
車から見える葉山町の景色。  
鮎は窓から顔を出し、潮風を浴びる。

○ 1 0 3 海辺（夕）  
浜辺を歩く風香と鮎。

風香 「緊張してる？」

鮎 「：まあ、そりゃね。親に会うんだから」  
風香 「大丈夫、無粋なこと言ったら私がぶん殴る」

鮎 「重いわ（笑）」

風香 「鮎も風香も少し笑って

鮎 「今年ももう終わっちゃうね」

鮎 「ね、速いね」  
（しばしの間）

風香 「あゝ悔しい、式に里奈は呼べない……」

鮎 「次は？」

風香 「え？」

鮎 「次はどうすんの？里奈の事、まだ諦め

風香 「てないんでしょ？」

風香 「里奈の養育環境が悪いことが証明出来  
たら、何かできるかとは」

鮎 「やってみる？」

風香 「次こそはだよ、次こそは」

風香と鮎、無言で見つめ合う。

二人の姿は夕焼けに照らされている。

# 【参考文献】